

木工研究会 椅子講習会 シェーカー家具

開催日時：2016年5月21日（土）13時から17時まで

会場 松本市 長野県工業技術総合センター 会議室

報告者 大深靖之

〈講師〉 石川義宗 東洋美術学校デザイン研究室 専任講師

宇納正幸 宇納家具工房主宰

〈講演要旨〉 第1部 「シェーカー教徒」の思想や暮らしとデザインについて

講師：石川義宗氏

### 背景

1774年、アン・リーという女性をリーダーとして9人のシェーカー教徒(以下シェーカー)がイギリスのマンチェスターからアメリカ大陸に渡ってきたことから活動が始まった。独立戦争の影響を受けたことや、資金集めのために10年以上をかけて1787年に最初の村ができた。当時は西部開拓時代で、「開拓することは神の意志」という使命感のもと、村は各地に広がっていく。シェーカーの正式名称は「キリストの再臨を信じる人々の共同体」である。プロテスタントに属し、偶像崇拝を禁止しているため彫刻や教会などは作らない。また、結婚をせず、私有財産も持たない。

### シェーカーの1日

夏は朝4時、冬は朝5時に起床する。起きると椅子を背中合わせに置き、ベッドのシーツをかけて座面の上に枕を置く。男性は排泄物を屋外へ運ぶ。朝食は朝6時。男女別々の入口から食堂に入り、別々のテーブルに座る。食事中は物音を立てたり会話をしてはいけない。また、テーブルクロスがいらないくらいに清潔な状態を保つようにした。食事のメニューには菜食主義者に対応したものもあった。朝食が終われば各々の仕事に取り掛かる。仕事内容は木工作业、製材、酪農、畑仕事、家事労働、子供への教育などで、男女で分業されていた。シェーカーの村にいる子供たちは引き取られてきた孤児である。毎晩就寝前にはミーティングをする。日曜日は集会場に集まり礼拝をし、賛美歌を歌ったり、ダンスを踊った。外部から来た人に入信を促すことも集会を行う目的の一つであった。

### シェーカー家具のデザイン

簡素であること、軽量化していること、彫刻的な表現はあまりなく平面的であることなどが特徴である。

\* 椅子

- ・ 初期はウィンザーチェアを含め様々なタイプの椅子を使って生活していたが、統一化が進んでいく中で、1930年までには装飾を排除していき、slat backチェアに一本化された。そのほかの椅子は破壊されるなど一種の検閲が行われた。

- ・ slatbackチェアは挽物の脚、3、4枚の背板、布や木の皮を使った座面で構成されており、背もたれと脚は一本の挽物でできているバックポストという構造。壁に掛ける習慣があるため背柱は傾斜していない。
- ・ 女性でも持ち上げられるくらい軽量化が進み、基本形が出来上がるとバリエーションを増やしていった。
- ・ 村の男性人口は女性の約半数ということもあり、背もたれや座面のような編む作業は女性が担うことで量産化の体制を磐石なものにしていった。
- ・ 人口が減って次第に村のルールが緩んでいくと簡素を重視する美意識も徐々に薄れ、装飾が復活していく。外部社会の流行に影響され、回転椅子や背もたれの角度を変えられることができる椅子など新しいデザインでの販売も始められるようになった。

#### \* 箱物

- ・ 平面的で細かく分けられた引き出しや建築との境界線が曖昧な部分が特徴である。
- ・ 村がオランダの植民地だった場所に作られているため、オランダの壁面収納の様式を踏襲している。
- ・ 引き出しのつまみは壁に取り付けられるペグにも転用されている。また、壁に限らずあらゆるものに引き出しをつけており、これは生活の全てにおいて秩序を与えなければならないという思想によるものである。

#### \* 職人と技術

- ・ 職人はもともと大工だった人が多かった。
- ・ 職人不足のため遠距離の村と村とを行き来し、見習いに技術を教えていた。その際、様式やルールは口述で伝わっていった。
- ・ 現代とほとんど変わらない手道具と木工機械を使用していたが、機械の動力は水力があった。
- ・ 1813年以降丸鋸が導入され、大きな進歩があった。
- ・ 木工は男性の仕事と決まっていたため、工房へは女性が入ることはほとんどなかった。

## \* 女性と農耕社会

- ・ シェーカーの村は農耕社会であるため女性が神聖化されており、女性が元気で生きいきと生活していた。
- ・ 女性が行う家事労働は一ヶ月交代で役割を変えていくが、料理担当は年配の女性と決まっていた。
- ・ 家事労働の負担を軽減するための道具も開発された。洗濯機やストーブを利用した乾燥室、エレベータのようなものも作られた。また、布はハタ織機を使い織っていた。
- ・ 男性の服の管理は女性の仕事で、田舎にも関わらず皆フォーマルな服装をしていた。
- ・ 農作業に使う農機具にまで家具のような美しさが求められた

## 第 2 部 「シェーカー家具」の技術や用材などについて

講師: 宇納正幸氏

現在に到るまでについて

### ○ アリス・ファーム時代

- ・ 大学卒業後、雑誌で見かけて興味を持ったアリス・ファームへ就職する。そこではシェーカーの暮らしと同じ様な衣食住をする共同生活を送っていた。
- ・ 仕事は小物から始まり、兄弟子たちのアシスタントをするようになるとオーバルボックスの製品開発も担当した。しかし、当時は4ミリ厚のナラ材でオーバルボックスを作っており、商品化には至らなかった。
- ・ 2年目からは椅子担当になる。1人で1ヶ月100脚制作したが、挽物は外注に出しているため15ミリの穴をひたすら開ける日々を送った。
- ・ アリス・ファームではナラ材を使用していたため、強度的に柔軟性が無く、折れてしまうことが頻繁にあり、返品も多かった。
- ・ 4年目にはナラ材のテーブル製作するようにはなったが、単純作業の繰り返し次第に苦痛になり退社を決意する。

### ○ 退社後

- ・ 憧れていたアメリカの木工家ジェームズ・クレノフやデニス・ヤングらの工房を訪ねる旅をし、刺激を受ける。

- ・ 今後はクレノフのような創作家具を作ろうと思い、シェーカーチェアのように丸棒で構成された椅子はもう作るまいと決めていた。しかし、帰国後に最初に製作した椅子は出来上がってみればシェーカースタイルの椅子であったことからシェーカーを毛嫌いしていても自分の中から消せないことに気づいた。

### ○ 独立後

- ・ 帰国して自分の工房で製作活動を始める。当時はシェーカーをリデザインした様な道具を作っていた。最初は食べていけなかったがどうにか10年くらいは続けた。
- ・ 1997年からアリス・ファームのシェーカー家具製作を引き継ぐことになる。大きな仕事を受注する様になり、スタッフも3人になった。
- ・ 仕事が暇になれば営業に回ったが、自身は営業に向いていないため精神的に苦しかった。また、自分が作るシェーカー家具はどこか違うと感じながらもアリス・ファームを引き継いだ後の10年間は悶々とした気持ちで取り組んでいた。
- ・ そんな折、何年間も開かなかったシェーカーの文献を開いて見たところ、昔とは違う見え方になっていたことに 気づき、素直な気持ちでシェーカー家具と向き合うようになる。以後、自分の「シェーカー観」というものができあがった。

### 3、シェーカー家具について

- ・ シェーカー家具を作ることは簡単であるが、取り組む以上は自分なりの「シェーカー観」を持って、勉強して取り組んでほしい。
- ・ 当時どのように製作していたかを想像しながら、当時と同じ材料を使って製作すると見えてくるものがある。例として、オーバルボックスを当時と同じメープル材で作ることで、スワロウテイルと言われている継手部分の形に意味があることが分かった。ウォルナットなどと違いメープルでは継ぎ手部分に釘を打とうとしても弾いてしまい上手く打つことができない。よって指3本で押さえやすいような継ぎ手の形にしたと思われる。
- ・ 当時のシェーカー家具の中にはアメリカンチェリーで作ったものもあるが稀な例であって基本はメープル材を使っていた。ホワイトアッシュもメープルと同じ強度だった、シェーカーたちにはアッシュの木目が装飾に見えたため彼らの思想に合わなかったと思われる。木目を隠すためにペンキでベタ塗りしたものも多かった。
- ・ シェーカー家具は家具というよりは道具である。特に量産化以前の家具は商品としては成り立たないものが多く、労働のための道具として作られていた。

- ・ 軽い、細い、無駄がない、という教義を元で作っていたため強度的な必然性からメープルを使うに至ったと思われる。部材に鉄を使用しているのも頼りない木部を補強するためである。シェーカー家具は祈りの中から生まれてきたデザインと言える。
- ・ もし特許申請していたら何百～何千と取得していたと言われている。

#### 製作方法について

- ・ できるだけオリジナルと同じ様に作りたいのでメープル以外では椅子を作ったことはない。また、メープル材では折れて返品されたことはこれまで一脚もない。
- ・ 接着剤はタイトボンドを使用。塗装は亜麻仁油を2回塗りしている。
- ・ ホゾはプライヤーで木殺しをし、手で押して入る程度のはめ合い具合にする。
- ・ 背や座に張るテープは岡山県の早瀬商店の製品とアメリカで輸入した製品を使っている。
- ・ 座のテープの中にはウレタンフォームを挟んでいる。
- ・ 椅子の曲げ木は、コンパネで作った蒸し箱の中で10分ほど蒸してから曲げる。
- ・ オーバルボックスの曲げ木は、ステンレスの容器に入れ5分ほど煮てから曲げる。
- ・ シェーカーチェアの背柱の先端部分は持つためのハンドルではなく、割れを防ぐための形状ではないかと思われる。先端はギリギリまで旋盤で加工したのち、不要部分を切り落とし小刀等で丸めて仕上げている。

#### 石川氏のお話



#### 宇納氏のお話

